映画、本、歴史のこと ＜第１回＞

有田誠（ありたまこと） 京丹波町在住の映画愛好家。

写真は、中国吉林省臨江の鴨緑江畔から北朝鮮平安北道ジュンガンを望む。2012 年 12 月筆者撮影

七十才を越えるとおもしろい。世間的には歴史の範疇に入っているのだから。七十年というのは、過去と現在がひとつの時間の流れとして見えることである。

プーチンがウクライナを侵略する現在は、大日本帝国が蒋介石や毛沢東をなめきって泥沼に陥った過去とそっくりだ。

小川哲（36）

「作家が未来について考えるとき、参照するのは過去と現在だ― 今ここで目にしたことは、何年、何十年か経って、かならず繰り返される。歴史とはそういうものだ」。

これは今回、『地図と拳』（集英社）で直木賞をとった小川哲の言。作品は満州の寒村、李家鎮（リージャチン）、のちに都市が建設され仙桃城（シェンタオチョン）と改名される架空の場所を舞台とする。一八八九年から一九五〇年の満州興亡記である。

日中露の登場人物たちのくどい心理描写もない。死ぬときはサラッと死んで、何ら感傷性もない。人間の行為を六百五十頁を費やして淡々と、しかし、力強く描いている。

唐嘉邦（タンチャパン）（38）

島田荘司推理小説賞というのがある。中国語で書かれたミステリー長編を対象とする。台湾、香港、中国などの応募作から選ばれる。

第六回の受賞作は、唐嘉邦の『台北野球倶楽部の殺人』（文藝春秋）。日本支配下の台湾の物語だ。

日台の野球狂の倶楽部メンバー二人が、別々の列車内で殺される。時代は一九三八年、日本のプロ野球発足がその二年前になる。

当時は六大学や都市対抗野球に人気があったらしい。高雄商業学校のエースで四番、あの大下弘を母校の大学に獲得しようとするなかで、事件は起きる。列車のアリバイ崩しは松本清張の『点と線』、過去を消そうとする人物は同じく『砂の器』を連想させる。

植民地下の日本人による台湾人差別の状況が背景として描かれる。「韓国は反日、台湾は親日」などという思考停止者には、この滋味は摂取できない。切ない結末だ。

坂上泉（32）

作者は東大文学部日本史学研究室で近代史を専攻。『渚の蛍火（けいか）』（双葉社）は、一九七二年四月、復帰直前の沖縄が舞台となる。

流通するドル札百万ドルが強奪される。琉球警察は日米両政府に秘したまま、限られた時間内での捜査にあたる。アメリカ支配下の琉球警察という設定の小説は初めてだろう。

著者の前作が『インビジブル』（文藝春秋）。満州開拓、現地招集、シベリア抑留の男の足跡から、一九五四年大阪での連続殺人事件に話はつながる。

この年、六月八日に国家地方警察と自治体警察を都道府県警察に一元化する改正法が公示、翌日には防衛庁設置法と自衛隊法が公示された。

捜査から、代議士秘書殺害に始まる被害者たちが、満州から戦後日本を喰い物にし続けた実態が浮かび上がる。

敗戦から七十七年にして昨年、三十代の作家たちが現代史に材を取った小説を出版したことに心が躍る。昨今の政治状況を見るにつけ、こういう若い人たちの知性に日本を委ねたいと切に思う。

平山周吉（70）

この小津安二郎映画の登場人物みたいな名前の人は「文学界」元編集長。昨年五百五十頁の大著『満州グランドホテル』を刊行した。

かつての満州に関わった政治家、官僚、実業家、俳優などを山のような資料をもとに描いた労作である。なお、カバー表紙のイラストは、全八巻長編マンガ『虹色のトロツキー』（中央公論）作者、ガンダムの安彦良和（やすひこよしかず）（75）。

平山周吉は、わたしと同じ一九五二年生まれ、あの時代を直接には知らない。しかし、三十代でも七十代でも、こうした作家たちに共通するのは、過去を現在へとつなぎ、この国の未来を想像しようという真摯な姿勢である。

国家は人々を分断して統治しようとする。出自、年令、性別、人種、国籍と何でも利用する。しかし、過去から現在への時間を分断して、人々を操作することも忘れてはいけない。

本屋大賞の号泣本やネトウヨ本など、幼稚化した出版界の一隅には、こういう頼もしい老若男女の手になる面白くてタメになる娯楽本がけっこうあるのだ。

沢田研二（74）

古今亭志ん朝風に言えば、「世の中ついでに生きている」。こういう脱力感は、真面目な人からしか出ない。

沢田研二が『土を喰らう十二ヵ月』でキネマ旬報主演男優賞をとった。この役者も脱力の人である。脱力とは、イイ加減さと本気度に均衡がとれているさま。

水上勉をモデルとした作家が信州で一人暮らしをしている。野菜をつくり、自炊する毎日の繰り返しである。とは言え、亡妻の妹が押しつけてくる鬱陶しいことも、嫌な顔もせず引き受ける。この義理の妹夫婦を演じる尾身としのりと西田尚美も演技を楽しんでいるようだ。

沢田研二の代表作『太陽を盗んだ男』（79 年）では、ダルそうな中学教師役。原発から核燃料を奪い、アパートで原爆を作ってしまう。それで政府に要求するのは、〈テレビでプロ野球中継を最後までやれ〉である。

全編ムチャクチャさでつないでいくが、開巻、元皇軍兵士（伊藤雄之助）が、皇居前で修学旅行生をバスジャックする。このシーンで、映画は最後まで不穏な空気に包まれることになる。

この中学教師と信州の老作家に落差はない。沢田研二の魅力はそこにある。

どちらの映画でも、鉄腕アトムの主題歌を口ずさんでいるのだ。

映画『土を喰らう十二カ月』（2023 年 中江裕司監督、水上勉原案、沢田研二主演）より